平家物語圖會 後編 三

へ13
2693
9

2693
9

宮内省圖書寮

平家物語圖會卷之九

目録

○範頼義經宇治勢ヲ分ル圖　久栗津原ゆ義仲を討
佐々木梶原宇治川の上陣を爭ふ圖
今井四郎中原兼平自害の圖
○一谷軍熊谷平山先陣を競ふ生田杜軍梶原平三
二度の駕
生田森軍梶原源太箙ゆ梅花を折箸戰ふ圖
摂列一谷鵜越坂落の圖
○一谷落城平家の諸將士討死一門再び海上ゆ漂ふ

岡部忠澄忠度と組討熊谷直實敦盛を招く圖

以上

平家物語圖會巻之九目録終

平家物語圖會巻之九

東武　高井蘭山公述

範頼義經宇治勢ヨヲを破石田為久栗津原の義仲とす

寿永三年正月。院の御所拜礼もなく。内裏の小朝拜も行はれず。平家は筑紫國八嶋の磯ゆゝしく送迎の年の餞。儀式も事宜なく。節會も行はれず。四方拜もなく。腹赤も奏せず。吉野の國栖を奏なく。青陽の浦吹風和ぬ。日影長閑に成行なれども。氷ぬ閑られて。心地寒苦鳥ぬ異なるに。東岸西岸の柳南枝北枝の梅遲速閑落。目ゆも心ゆも怒なる。花の朝月の夕。詩歌管絃。小弓。扇合。繪合。草盡。虫盡の興ぞ。以前を思ひ出。若續に未き日を暮し難なり。同十二日ぬ。木曾左馬頭義仲院宣に。平家追討のため西國へ發向せ給ふ西奏聞。十三日首途と定し。鎌倉殿木曾が狼藉を謐んと。範頼

義經西大將ゆく。數萬騎の勢をさ〜上せ。美濃伊勢迫押寄るをかえ
しふ。木曾殿大ゐ愕き。宇治勢田の橋を引く。軍兵を分て宇治勢田
足ざまざまに。勢ヨワハ大々ゆゑ。今井四郎兼平。八百餘騎宇治の
梨山田次郎五百餘騎一口に叔父信太三郎先生義教。三百餘騎を向うる。
東國より攻上る。大々の大將軍蒲冠者範頼。搦手の大將軍八九郎冠者
義經。宗徒の大名三十餘人。都合其勢六万餘騎。其比鎌倉殿ゐ生喰磨
墨とく。名馬ゆゑ。生喰を梶原源太景季。頻ゐ所望やけ是。自然ゐと
あんゐ。頼朝ゐ乘給ふ馬ぞ。もしかめるをと。磨墨を給ふ。其後
近江國の住人佐々木四郎高綱。ゐ暇を乞ゐ奉る。鎌倉殿所望の者へ參ら
ゐみ。其日存ぜずして生食を賜ゐぬ。佐々木畏る。今度此馬ゆく。宇
治川の真先を渡しゐべし。若死せうと。今一百五十人ゐ先とせうまし〜と。公百騎ゐ

さとく。罷立。結合の大小名。荒涼のヤ猛やと。呼合ける。扨も駿河國浮嶋原ゐ
く。梶原景季高綱ゐ控。皆く渚家の馬ゆ。乘ける。鞍押置ひくゐ。
餌。我ハ乘口ゐ引せ。諸口ゐ率せ。銭十万も引透中ゐ。磨墨ゐ目ゐ
嬉しく。ゐふ。ゐ生喰ゐ。出来る。金覆輪の鞍。小總の鞦。白轡ゐ白沫噛せ。
舍人餘ヨワ附。引ゐ。躍せくゐ。梶原打寄。進殿ゐ名馬ぞと問べ。佐々木
殿ゐ。三郎殿ゐ。四郎殿ゐ。四郎殿ゐ。引透ゐ。梶原安らゐ。
梶ゐ石仕ゐ。景季を。佐々木ゐ名乗ゐ。遺憾ゐ。今度都へ上て。
木曾殿の御内ゐ。四天王と。ゐ。ゐ。樋口。今井。楯。根井と。組く。死ゐ。
一人當千と。ゐ。平家の侍と軍し。死んと。ゐ。今。
佐々木を待受。引組刺違へ。好侍二人死し。鎌倉殿ゐ損ゐ。ゐ。
を。佐々木何心ゐく。歩せ来る。ゐ。佐々木殿。生喰を賜ふ。上せ。ゐ。

佐々木
梶原
宇治川の
先陣
争ひ
図
佐々木四郎高綱

ら已哀是此仁も内々所望せ〜と。宣つる物哉と心附さるべい。今度此大夏の
上りけが定て宇治勢田の橋を引ぬべし。来度さん馬ろの生嘶とやさるやと
思ふ。ごえ
思ふぞもの辺のやさせをふぐふの赦とろをと承る。増て高細ろどぶやたを。
と宣へ。後日めいろるを勘當もあれ。軍功わろぶや詫んと。打立前夜の合人と
心合せ。あるを秘蔵る名馬を盗侍〜くいそつゆと云けれ。梶原此詞ふ
忙然〜腹ゲ立て。景季も盗ろ〜ぬと。くぞ除ける。佐々木ふ賜へ
黒栗毛の究て太逞ぎ傍を拂て。馬を人を食けれ。生食とハ名付る。
八寸の馬に梶原ぬ賜〜も極て太逞ぎ真ふ黒ろけれ。磨墨と名付て高東
国の西将。尾張国ぬ〜二ひふ分。蒲殿ふ相伴ふ人。武田太郎。加々美次郎。一條
次郎。板垣三郎。稲毛三郎。榛谷四郎。熊谷次郎。猪俣小平六と先と〜其勢
三万五千餘騎。近江国野路。篠原ふ陣を丸九郎御曹子義経ふ従ふ安田三郎。
大内太郎。畠山庄司次郎。梶原源太。佐々木四郎。糟屋藤太。渋谷右馬允平山
武者所を先と〜。其勢二万五千餘騎。伊賀国を経て。宇治の橋詰ぬ押寄
けり。宇治勢田ぬ橋を引。水底ぬ乱株打て。大縄を張。逆茂木ふ繋流掛ぬ。
比ハ睦月廿日餘り。比良の高嶺志賀山。昔長柄の雪も消谷々の氷解。水ハ
ゆを益て〜ろ。白浪黛う漲落。逆巻水も早けれ。瀬枕瀑布を顕せり。夜を
若〜と明行ど。河霧深く立籠て。馬も鎧も毛色安定ぬ〜。義経河端ふ
行出水の面をん渡し。人々の心をんぞ淀一口ぞ向ふぞ又河内路ぞ廻ぞ水
の落足をぞ待ぞ。のぶせんと宣ふ処。武蔵国の住人畠山次郎重忠三十騎
ばかり。進み出此河の沙汰ハ鎌倉ぬ〜ぞ申せ。海川筋ぬ来ぬ
琵琶湖の末ぬ出ぬ待ぬ水ハ早し。治承の軍ぬハ。足利田原又太郎忠綱十七歳
ゆく渡〜けるも。鬼神ぬ〜もいろ。重忠瀬踏仕んと。丹嶽を宗と〜。五百

餘騎先くと鑣を並るゐ。平等院の民橘の小嶋が崎より。武者二騎引けゆ
ゑ。みな出来る。一騎は景季。一騎は高綱。人目も何たそと内く先を心掛る
らん。梶原は佐々木より。一段許進んで。佐々木声を。いかに梶原殿西國一の大
何ぞ。腹帯の延くえい。縮めと云々。梶原左もみそらんと。手綱を馬の結
髪に乗。弓は弦を口に哺へ左右の鐙踏透し。腹帯の緒を解く。揺挙〳〵縮
直に。佐々木其間に其をつと弛拔河へ颯と打入る。梶原竊に抜とは知けれ
續く乗入いつゐ佐々木殿高名せんとて。不覚せぬ事。水の底も綱あらんと。
や。佐々木さぞみてうんとて。太刀を拔馬の足に掛る大蹈ふつと打切る。宇
治川早しと云ども。天下一の生食。若もうくを直に推渡し。向の岸に打上る。梶
原は磨墨は。川半ばに筏繫形に推流され。遥の下より打上ぬ。佐々木は鐙踏
張鞍嵩に起揚。大音上。宇ヨヲ天皇九代の後裔。近江國の住人。佐々木四郎高綱。宇治川の先陣ぞやと名乗る。畠山五百餘騎。岸に渡を
呼ぶ。向ふの岸に待ち受。山田次郎が放ち矢。重忠が馬の額。篠深に射られ
揚る。ゆゐ。弓杖突く下立る。岩波児の手先へ颯と押掛る。重忠水底を
潜向の岸に着ける。打上らんとする後に扣る者あり。誰と問へば重親と答ふ
大串ぞ。さい。大串は我烏帽子児なり。餘は水早く。馬は川中より押流され。力
及ず。跡に遅く渡り。和殿原は重忠に助られたれとて。引綱ぐ
岸の上へ擲揚げ。其儘にて直に。太刀を拔く真額に。大音声に武蔵國の
住人大串次郎重親。宇治川歩立の先陣と。名乗かけ。敵も味方も
空一度に嘲と笑ける。重忠は乗替渡り着を待乗く。敵中へ駈入長瀬判官代
重綱に組ける。重忠は坂東一の大力。重綱を対れ。今日の早神に祀ける。
宇治を堅く。皆は禦戦ける。大勢を川を渡し。攻打ゆゑ。小勢ゆく叶

がさく木幡山伏うちをさうく落行けるを瀬田の大夫稲毛三郎重成が計ひにて田上の供御の瀬を渡しける。義経赤脚を以て宇治の方破りと。軍の次第注進ある。鎌倉殿佐々木四郎高綱二陣梶原源太景季一番首八畠山次郎重忠長瀬判官代重綱と組討。其外具足注しうつ。大手搦手破りて木曽殿八宮期の暇やさんとて。六條の御所近き辺に立。さうく法皇へ奏聞の旨あるべき門前うつくし。高倉宮の御所へ寄て宮期の名残惜んとて。頃ハ如何今参せう。越後中太未光走来て。敵既に河原に攻入に。何とく打解渡せ給へ。猶立出給へとやせた。猶立出給へ。未光八前立て。四方山に待ゆめとて。腹掻切て死ぬけるぞ。我を勧る自害よとて。断打出ぬ。上野国の住人那波太郎廣純と兄弟。六條河原に打出て東国勢より塩屋五郎惟

廣勅使河原五三郎有重真先蓮雲霞の大勢續まり。木曽殿をとり巻く。撰討ぬせんと。大将義経八院の御所を守護せんとて。五六騎ゆく六条殿へ馳至。大膳大夫成忠東の築墻の上に登り。慓くと渡せば。武士五六騎除曽に戦ひ成て。射向の袖春風に吹靡せ。白旗飄と翻し。砂煙立て勢る。成忠浅猿木曽殿又ありけとや。院中公卿殿上人女房達を今度世に矢八果ん。危ふ処成忠重て奏聞しける。今日始て都へ入東国の武士と覚ん皆笠効昏つくうんとやも果ぬ。大将軍義経下馬しく門を敲せ大音に鎌倉征夷大将軍頼朝が弟九郎義経宇治の方を攻破り。御所中

形打たる兜の緒を締。金作の太刀を帯。二十四指たる爪黒の矢負。滋藤の弓
の鳥打の本を紙廣さ一寸斗に切。左巻にまきたるを是ぞ今日大将の効と見えし
法住寺中門の連子より叡覧ありて。勇々敷氣ある者共かな皆名乗せよと
仰けれバ。先大将軍九郎義経。次に安田三郎義定。畠山次郎重忠。梶原源
太景季。佐々木四郎高綱。渋谷右馬允重資とぞ申上ける。鎧ハ色々替れ
ども類なる柄何れも屈竟の兵と見えし。義経を大床の際へ召て。合戦の
次第を尋ありて。義経畏て。兄頼朝木曽が狼藉を鎮んため。範頼義経に六
万余騎を添差上せしに。範頼ハ勢多より向ひしが未一騎も見えず。義経ハ宇治
を攻破り馳参り。御所守護せんため馳参らしハ。木曽ハ河原を上りに落ぬるを。軍兵共
に追せ候へバ。今ハ定て討ぬべしと存ずる折から申さるゝ。法皇限なく御感
ましく。又木曽が余党など来て狼藉もやせん汝能々守護せよと仰けれバ。

奉て四方の門を堅待程に兵共馳集て。忽ち二万騎ばかりに成けり。木曽殿ハ
自然の事あらバ。法皇を取奉て。西国へ下て。平家と一つに成んと力者二十人汰
へ置れしが。義経疾来て堅く守護しまゐると聞て。此工夫空く今ハ叶
ドと河原を上りに落行に六条河原。三条河原の間にて。討るべかりし事度々
なりしが。からくして血戦し。小勢にて雲霞の関東勢を数度追払ひ
しが。去年信濃を出しに。五万余騎。今日四宮河原を過るにハ。主従七騎に成に
けり。かゝらんにハ今井を勢多へ向ざりしを。幼少竹馬の昔より。死ば一所に
と契しに空しく所々に討れんよりこそ口惜けれと後悔限なかりける。又信濃
よりして巴款冬とて二人の美女を具せられし。款冬ハ労ありて都に留りぬ。中
にも巴ハ色白く髪長く。容顔美麗なりけるが。究竟の荒馬乗の悪所落
弓矢打物とりてハ。いかなる鬼神にも遇ども一騎当千の女なれバ。一方の将に向

らるゝゆゑ。高名肩を比る男ども。今日も数度の苦戦。七騎ゆ
なる迄薄ども
員ぞ在しゝ。木曽殿ハ長坂より丹波路へも。韜華越しゝ。落ぬと唯今井を心
苑ふく。勢ヨリの方へ落ゆふ。今井も八百餘騎ゆく。勢ヨリを堅ろふ。東国の大軍ゆ
攻立ぬと。五十騎斗。旗を巻せく。都の方へ走りけるゞ。大津の打出の濱ゆく。木
曽殿ゆ行逢互ゆ契の朽ぜぬを悦び。義仲ゞ勢山林ゆ逃散く。此辺ゆも少しも
隠れをえん。汝ゞ旗を建くゝと。今井畏く巻持せ。弦挑さゝ上さるハ。案のごと
く彼牙此牙より弛集く。三百騎ゆ及ろ。いざ此勢ゆく。最期の軍花ゆ咲せ物
と。甲斐の一條次郎ゞ。六千餘騎ゆく扣ろ。面も振ゞ切く入。木曽殿其日の装
束ゆハ。赤地の錦の直垂ゆ唐綾威の鎧。鍬形打ろ。冑。聽物作の太刀を帯。重打の
矢の射残を。頭高ゆ負成。滋藤の弓の握をえ。畏蘆毛と云。木曽立の馬ゆ。金覆
輪の鞍置。真紅の厚總ゆ。押掛を餝。馬上高く大音揚。日来ハ聞えん。今ハ見られ。

左馬頭兼伊与守。朝日将軍源義仲ぞ。甲斐の一條次郎と。宇我を討く。右兵
衛佐ゆ。いざ。ものと。ゆるゆぞ。もえハ大将ぞ。餘ものハ者ども。漏ものゝ若黨ども。
ゆ。竜我討えんと競ひろる。木曽勢僅。廿分一の応對ゆ。必死の鎗。大烈
しく。一條ゞ勢数百騎。討ゝ。四方へ散乱。木曽勢も五十騎斗ゆ成けるゞ。又
も土肥次郎実平ゞ。二千餘騎へ切く入。双方死殿の山を染しゝ。主従五騎ゆ
成ろ。木曽殿。巴を召。汝ハ女ゝ。疾く何地へも落ろ。義仲最
期の軍ゆ女を具せしと。いとをしも口惜ろ。疾くと。やさる。汝ハ。君
ゆ最期の軍ゆ。つれ。ものと。敵を俟。武蔵国の住人御田八郎師重と
云。剛力者。三十騎計ゆく。ものりける。其中へ破く入。八郎ゆ押並しゝ。
伏馬上ゆ。頭捻切く。捨ろけ。其後物具脱。捨東国の方へ落ゆる。塚太郎
光盛も討死しゝ。塚別當ハ落ゆろ。木曽殿。今井ハ二騎。成く。宗平ハ

某一騎八餘の武者千騎と云石いべ。射残せ。矢。セッハツの暫く防矢仕んの上
ゆるへい。粟津の松原ゆく静ゆ必自害いべ。と申ス。いやとよ我ハ伯河原ゆく。
ゆを成ゑ。故と二ツ所ゆとゆふ斗ゆヨワくの敵ゆ後をうけてく。今迄も在し和兼
平涙を流し。弓矢ハ日来ハ高名ゆ。実期の不覚ハ永代の瑕ゆくい。
日本国ゆ鬼神と云ハ。ひし。木曽殿ハ何某と云名もうゑ郎等のゆゆとあゆ。
口惜ゆ。ひし。と緊く挟ゆ。唯一騎。松原さして紅ゆ。兼平ゆ。
追来る敵を防戦ふ。木曽殿ハ薄氷張し。深田あり。ゑ知ゑ。正月廿日ハ相ゆ
ゑ。足のを安定ゆ。馬を縄と打入ゑふ。馬の頭ゑ。ゑ。打たゆれ。傷
らゑたそ。ゑ。今井ハ。ゆ。ゆし。と。ふり仰ゑ。ふれを。相摸国の住人三浦の石田
次郎為久追来て。兵ど故し。矢ゆ。木曽殿内冑を射ゑ。痛ゆ。ゆ。眼箱式
馬の髪尾ゆ推當。俯し。ゆ。石田ゆ郎等二人落合頸をゑ大音ゆ。此日来鬼神と

宣し。木曽殿を。三浦石田次郎為久討れ。と。ゆ。今井遠く是を。ゆ。今
ハ誰を拘んと。大音ゆ。遠。ゑ。ん。ハ音ゆ。通。ゑ。ん。ハ眼ゆ。ゆ。木曽殿の乳
夫子ゆ。今井四郎中原兼平。生年三十三。四天王の隨一斯者在と。鎌倉殿も知
ゆ。主君戦死ゆ。ゑ。冥途ゆ仕ん。自害ゑ。ゑ置。ゆ。ゆ。
太刀の鋒を口ゆ銜。馬。ゑ。真倒ゆ。飛落貫れ。ゑ。今井ゆ兄樋口次郎
兼光ハ十郎蔵人を討。ゑ。五百餘騎卒し。河内国長野の城へ寄。ゑ。ゆ。河
し紀州名草ゆ在と。是ハ攻落ゆ。都の軍。ゆ。捨置。ゑ上る。道定ゆ。木曽殿
討死。今井ゆ自害を承。ゑ。ゆ。何ゑ。ゆ。ゆ。
ゑ。ゆ五百の勢故。ゆ。落。ゑ。ゆ。廿騎程ゆ。ゑ。ゆ。忙然。ゑ。ゆ。児玉党ゆ因の者ヨワく。樋
口を降ゑ。ゆ。命を。ゆ。ゑ。ん。と。ゆ。種ゆ。ゆ。拵ゆ。ゑ。樋口空し。ゆ。降人。ゑ。ゆ。此段両大
将ハ。ゆ。ゆ。義経殊ゆ樋口を惜。院。伺ひ命ゑ。ゆ。ゑ。院中の人。女房。ゑ。ゑ。

今井四郎
中原兼平
自害の
図

住寺殿を焼高僧貴僧を失ひうしぬ。皆今井樋口と美濃の高々くあり。是ぬ
を助命わるべ仮ばと。同ぬ中さるく四郎兼ぬ元衆ぬ定ぬ。同廿三日新摂政殿
停らるゝ。本の摂政還着しぬ。殃六十日の間ぬ昏らとこそ果ぬ夢のごとし。
前関白基房公入道松殿の中息とぞ。同廿四日木曾左馬頭。餘黨五人が頸を都ぬ入大路を渡
本の摂政（関白基通公清盛公の聟）
さる。樋口頸の供せんとぬ成ぬ。ゆゑ藍摺の直垂立烏帽子ぬく渡さる。廿五日ぬ斬ま
ぬ。異国周の末。虎狼の国衰へ諸侯蜂の如く起り。時沛公先咸陽宮ぬ入とぞ。
聊ぬ侵掠ることなく。徒ぬ函谷の関を守る。項羽を俟漸々の功ぬく。天下を治し漢
朝の基業成ぬ。木曾殿も先都へ入ぶ。鎌倉殿ぬ於指揮ぬ任さるんぬ。彼沛公
の謀ぬも劣るまじ。氣嵩暴戾のまゝく器量なる者。何ぞ人の上ぬ立得べき。
身の狂ぬ成ぬ。旭将軍の号を汚し。日わるぬ泉水ぬ掛らる。古今の癡漢と評し
一谷軍熊谷平山先陣を競ふ。生田森軍梶原平三二度の駕

玄桿ぬ平家玄年冬の比。潰列八島の磯を出。摂津国難波潟ぬ押渡る。西ハの
谷成城郭ぬ搆へ。東ハ生田の森を大手の木戸口と定ぬ。其間福原兵庫須磨ま
籠る勢。山陽道八ヶ国。南海道六ヶ国。都合十四ヶ国討ぬ召るゝ。所の軍兵十万
餘騎とぞ。一の谷ハ北ハ山。南ハ海。口狭奥廣く。岸高くして。屏風を立るぬ
異なるべ。北の山際より。南の海の遠浅ま。大石を累上。大木を伐て逆茂木ぬ引
深所ぬ大舟を成。側ぬ。楯揃ぬ。城の面の高矢倉ぬ。四国鎮西の兵ぬ。甲冑弓
箭を帯して。雲霞のごとくぬ列居たり。矢倉の前ぬ。鞍置馬ぬ十重廿重ぬ引
立たり。常ぬ太鼓を敲く。乱声ぬ。一張の弓の勢ハ。半月胸の前ぬ掛り。三尺の剣の
光ハ秋の霜腰の間ぬ横たへり。高き所ぬ赤旗多く打建て。春風ぬ吹れ
天ぬ靡るハ。唯火炎の燃上ぬ異なるべ。さて左かく一の谷へ渡さるゝ。四国の者
ども隨ぬ。中ぬも阿波讃岐の面々。源氏へ心ぬ通ぜ。平家ぬ矢ぬ射ぬ。源氏用ひ

まゝ〻と門脇平中納言教盛卿。越前三位通盛卿。能登守教経八子三人。備
前國下津井に在と雖。兵船十余艘ゆく寄ころに。能登殿大に志。昨日こそ我
等が馬の草刈こゝに奴ども。一人も洩さずと。船押双烈〻く追ふ唯源氏の下
沢に一筋の矢を射んと。ゆひの外遠員し。淡路福良迄迯く。此國に源氏三人西
と雖ども。故六條判官為義が末子。賀茂冠者義嗣。淡路冠者義久。是と共
に将に頼。城構せり。能登殿直に攻らるゝに。賀茂冠者討死し。淡路冠者を
痛み負生捕れ。其外百三十餘人が頸斬梟さる。福原へ交名記し進ぜ。門
脇殿は夫より一の谷へ寄られ。子息達は伊与の河野四郎が石丈寄せを攻らる。
河野通信は安藝國の住人沼田次郎が母方の伯父ゆゑ。一ツに成り〻ぬ。能登殿
忍ち安藝に押渡り。散々に攻めべ。沼田は降参。河野は猶頃も五百餘騎の
勢。五十騎斗に討成れ落行ぬ。能登殿の侍。平八兵衛為員に丸龍ら。主従七
騎に討成と。舟に乗んと道れ行を。平八兵衛が子。潰岐七郎義範。弓の上に
五騎射落し。主従二騎に成り〻ぬ。七郎馳来る。二騎に組ぬ。河野が郎等に。二人
組ぐ落七郎上に成る。郎等が首を掻んとする処へ河野近〻来り。潰岐七郎が
首掻切。深田に投入大音揚。伊与國の住人。河野四郎越智通信生年二十一。軍ぶ
かくとそ聞れ。我と思へ入く寄く面と。名乗捨。助〻郎等を肩に引掛。迯延
く伊与へ渡る。能登殿河野に討漏せ共。沼田降人に成。召具し。一谷へ参れり。
亦阿波國の住人安摩六郎忠景も。平家と背き。紀伊國の住人園部左兵衛忠
康一処に成り。和泉國吹飯浦に城構せり。能登殿押寄ぶ。叶じ京へ迯上し。
残る者ども百三十餘人の頸切られぬ。又豊後國の住人臼杵次郎惟隆。同國の
緒方三郎惟義。伊与の河野通信一所に成と。其勢二千餘騎。備前國へ渡る。今
木の城に楯籠る。能登殿三千餘騎に〻。渡られ〻ば城を強く寄せ毎度敗

軍も彼等ハ凡ての者ならざるゆゑ。福原へ押よせ。数万の兵を防ぎける。城中是を知らず。四方の勢に巻詰られども叶ず。臼杵緒方ハ豊後へ。河野ハ伊予へ渡すける。能登殿今ハ手近く攻る敵なきとて。福原へ帰られければ。大臣殿以下諸卿寄合。能登殿毎度の軍功を感称せられ。是より能登殿六箇度の戦ひとぞ。

同正月廿九日。範頼義経。平家追討の為発向すべきよし奏聞を院より。神代以来相傳る三種神器なれば。都へ返し入奉るべきよし。仰下さる。両人畏まり罷出。二月四日福原にて。故入道相国の忌日とて。佛事を遂行る。朝夕の軍立に過行月日ハ知ねど。去年ハ今年に廻りきて。憂かりし春にも成にけり。世の世にてゞ。供佛施僧の営み。ねんごろなるべきに。各差湊く悲しみ歎れける。福原にて此次除目行ひ。僧も俗も皆司なり。中にも門脇殿中納言にて。正二位大納言に昇られけるに一首の歌を奉りて官位ハ請ざりし

けふまでもあればあるかの我身かハ。夢のうちにも夢を見るかな

と詠まれけり。大外記中原師直が子。周防介師純大外記になる。兵部少輔正明五位蔵人になされ。蔵人少輔と召る。昔将門東八ヶ国を討従へ下総国相馬郡に都を立。我身平親王と称し。百官を立たりしかハ暦博士ぞなかりける。是ハ夫にハ似べからず。旧都ハ出されども。三種の神器を帯し。万乗の位に備りたまへバ。叙位除目行ふとも宜えなり。平氏福原を攻登しとて。故郷に残留まりし人々。皆悦合れしが。二位僧都専親ハ。梶井宮年来の御同宿にておはしけれバ。風の便りも申されければ。宮よりも御文あり。旅の空の猶御心苦しけれども。都もいまだ静ならず。細々と遊し。奥に一首の歌あり

人しれずそなたをしのぶ心をバかたぶく月にたぐへてぞやる

僧都是を顔に押当悲の涙塞あへず。去程に二月四日。源氏福原を攻べかりしが。佛事と聞く。供養を遂させんと延され。五日ハ西塞。六日ハ道虚日。七日の卯刻。一谷東西の

木戸口ゆく。源平矢合と定めらる。されば四日八吉日なりとて。大手搦手の軍兵二手に分て攻下る。大手の大将軍蒲御曹子範頼。相伴ふ人々。武田太郎信義。加々美次郎遠光。同小次郎長清。山名次郎義行。同三郎義行。侍大将ハ梶原平三景時。嫡子源太景季。次男平次景高。同三郎景家。稲毛三郎重成。榛谷四郎重朝。同五郎行重。小山田小四郎朝政。中沼五郎宗政。結城七郎朝光。左貫四郎大夫廣綱。小野寺禅師太郎道綱。曽我太郎祐信。中村太郎時経。江戸四郎重春。玉井四郎資景。大河津太郎廣行。庄三郎忠家。同四郎高家。勝大八郎行平。久下次郎重光。河原太郎高直。同次郎盛直。藤田三郎大夫行泰。と先々。其勢五万餘騎。二月四日辰の一點に都を立。其日の申酉の刻ばかり。摂津国昆陽野に陣をとる。搦手の大将軍九郎御曹子義経。相伴ふ人々。安田三郎義真。大内太郎惟義。村上判官代康国。田代冠者信綱。侍大将ハ

土肥次郎実平。子息弥太郎遠平。三浦介義澄。子息平六義村。白田山庄司次郎重忠。同長野三郎重清。佐原十郎義連。和田小太郎義盛。同次郎義茂。三郎宗実。佐々木四郎高綱。同五郎義清。熊谷次郎直実。子息小次郎直家。平山武者所季重。天野次郎直経。小河次郎資能。原三郎清益。ヨヲ羅五郎義春。其子太郎光義。渡柳弥五郎清忠。別府小太郎清重。金子十郎家忠。同与一親範。源八廣綱。片岡八郎経春。伊勢三郎義盛。奥列の佐藤三郎嗣信。同四郎忠信。江田源三廣元。駿河次郎清重。熊井太郎忠元。備前平四郎成春。土屋三郎宗遠。鈴木三郎重家。武蔵坊弁慶。ほか。を先とす。其勢一万餘騎。同日同刻。丹波路を掛る。二日路を一日に打て。丹波播磨の境。三草山の東の山口小野原に陣取ける。平家の大将軍ハ小松新三位中将資盛卿。同少将有盛。丹後侍従忠房。備中守師盛。侍大将ハ伊賀平内左衛門清家。海老次郎盛方。を先とす。

三千餘騎ゆく。三草山の西の山口ゐ押ゑ〜陣をゑ其夜戌の刻。土肥次郎実平
を召て平家ハ是より三里隔て陣取り。今宵夜討もべしとて。軍議を示し。
諸勢へ觸し廻ふ小野寺の在ゐ火を掛。家こより野山草木燃連て。昼ゐ増て明て
斯して三里の山を越行鯨波を上て。平家ハ明日の軍とて熟睡せし習ゐ将
士一向ゐ周章噪て。向ふ者一人もなく。唯逃走るを追詰て。討ゑ皆時ゐ五百
餘人ゐ及ぶ。其員ハ数ゐ知ず。将士面目なくや播列高砂より舟ゐて讃州ハ嶋へ
渡りゐ。備中守師盛平内左衛海老次郎二人を具し。一の谷へ籠れ給ふ。大臣殿
大ゐ驚て先山の後方なりゐ各向ふにゐたんやとやさるゝゐ皆辞しやさしなり。能登
殿へ度々の使者。此度も頼度よしやさしゐ。能登殿の返事ゐ猟漁のごく。
足立の好方へ向ひ。悪ふらん方へ向つゞとなるべ軍ゐ勝とゐよるいつゞ。幾度ものへ
強ふらん方ゐ。教経兼て罷向べし。一方打破て進せゐたん。必安ふ思給べしと

ある
ゐ。大臣殿悦ぶ。越中前司盛俊を先として。一万餘騎能登殿ゐ附られ給ふ
兄越前三位通盛卿を具して。山の麓へ向ひける。此山の麓とハ一谷の後鴨越の
藤ゐ通盛卿能登殿の仮屋へ北の方迎寄て最期の名残惜ふ。能登殿
大ゐ怒て。此ゐ大ふ敵て教経を向られゐが。今ゐ山の上より敵落す程
なるべ取物もゐあゐ。縦弓を引ふ矢を番ゐ悪るべ。矢を番て
も弯ゐ猶も悪ふ。増て左様打解ゐ給ふ何の用ゐ合せ給ふ
と禁られゐ。通盛卿実も尤ゐ急ぎ物具して。人をゐ返し給ひ。五日の
暮方。蒲殿の子ハ兄陽野を立。生田の森へ攻迫くとゐ。敵所ゐ馬を休
馬飼ゐ。しばし遠笛ゐ焼て。平家方ゐ今寄ると相待て安き心
もなくゐける。同六日曙ゐ義経土肥次郎ゐ七千騎を副て。一の谷西の木戸へ遣し。
其身三千餘騎ゐて後の鴨越を落さんとゐ。丹波路より搦手へ向ふ。此処甚

難所ゆく。道も知ぐるぐ。武藏國の住人平山武者所季重。能案内知くい。
ゆゑ仕らんと。義経平山ゆ向ひ。和殿ハ東國育の者。今日始くうんぐる西國の山
の案内者ハ。城ーぐぐと宜ふ平山重ねくは茨花覚ぐゆ。吉野伯頼の花ハ見
た。歌人ゲ知。敵の籠さる城の後の案内ハ剛の武者ゲ知くゆと。是又傍若無
人ゆ宣ぐ。又武藏國の住人別府小太郎清重とく。十八歳の若者進ぜ出父
義重常ゆ。敵ゆ襲ぜ深山ゆ迷ぐ。老馬ゆ乗ぜ綱結く打掛。先ゆ追立て
行。必道へ出るのぐと。義経優ーうもやせ。是ハ齊の管仲ゲ故事ぐ然る
べ。雪ハ野原を埋ぐも。老馬ぞ道ハ知るとやぞとく。白髭毛の老馬ゆ鏡
鞍置白磨番ゲ綱結く打掛。先ゆ追立深山へ入ゆ。二月始のことなれバ峯ぐの
雪村消く。花ぐとぐる所もあ。谷の鶯音信く霞ゆ迷ゆ方もあり。上ぜバ
青山嶮く。下ぜバ梅花芳く薫る。往還人の跡絶く。苺の細道幽ぐ爰り

武藏坊弁慶老翁一人見ーー来ぜり。義経奇ぐ思ぐ。此山の獵師案内ぐせん
る連来ゆと。扨ぐく近う召。今是より平家の城郭一谷へ落さうとゆ。ゆ
と問ゆバ。努ぐ叶ひゆ。三十丈の谷十五丈の岩ぐ。容易く人の通ふこと
なくぐゆと。然ぐ鹿ハ通ふと。尋ゆ。ゆさんゆ。暖ゆ向ハバ草の深ぎゆ臥んとく。播
磨の鹿ハ丹波へ越。寒き時節ハ雪の裘ゆ。丹波の鹿ハ播磨の印南野へ越ゆとや
ける。義経其時鹿の通ん所を。馬の通ぬ所ぐ。汝ぜ。ぐ案内者ぐまと
宜ハバ。此身ハ年老く叶ゆ。然ぐバ汝子ゆ。一人ゆとく。熊王と云生年十
八歳の小冠者を。ぐ。父ハ鶯尾庄司武久と云。見ーー鶯尾三郎義久と名
乗せ。一谷の先打案内者ゆ見せぐれ。平家亡び。源氏の世と成く後鎌倉と中違
ゆ。奥列へ下ぜ。対ぜ。ゆ。時。鶯尾三郎義久と名乗。一所ゆ死せ。兵ゐ六日の夜
半ぐ。熊谷平山搦ゲゆ。熊谷子息小次郎を。ぐ。此ゆ悪所ゆ。ぐ雑

先と云とあやまり。土肥が承つる西の方へ寄。一の谷の真先掛んとやふ。小次郎左
誰も好む所。然るべくいそんとや。然らば平山も此ゆふべ先や心掛ん。密かに案
まと。小次郎畏く其旨を伺ふ。案のごとく熊谷ふ魁を越まじ。人ハあらじ
季重ハ一引も引まじ。我と独言しく居る所。下人が馬を飼ふ長食を叱しなまバ
平山左のひぞ。此馬名残も。今夜斗ぞとく打立こう。小次郎此由斯と告けまぶさ
ぞろんとく直ふ打立ぬ。熊谷ハ赤草の鎧紅の縅ゑ。獾太栗毛とく変る良
馬ふ朕ア。小次郎直家ハ沢潟を一入摺。高直垂ふ。藤縄目の甲。西櫻と云白月
げ毛なる馬ふ乗。旗指ハ黄塵の直垂。小櫻を黄ふ返こう成よろひ。黄河原毛なる
馬ふ乗。主従三騎落さんとする谷をバ弓ゑふ。馬ゑへ弛行程ふ。年来人も
通ぬ田井畑と云古道を経て。一谷の波打際ふ打出れバ。はるゞ夜ちぐら土肥実平
七千餘騎。塩屋と云処ふ扣居る成。夜ふ紛まつと馳通ア。西の木戸口ふ押寄ぶ。

城内もまゞ静やく音もなし。外ゆも駒を蒐と扣る者もあらん。こゝろ
猶際ふ歩せ寄大音あげ。武蔵國の住人。私市黨熊谷次郎丹治直実子息
名小次郎直家。一谷西木戸の先陣ぞと名乗ける。城内是を聞こゝろ。敵の馬
足を疲し。矢種を射尽さぜとゝく詈言答者もありける。良あつく武者二
騎。後ふ人ゆるを推ぞと向バ李重と答ふ足下ハ孰ぞ。直実ハ子ゆ待のふ辺
等ハ何ぞうぞ。宵よりと答ふ李重疾ふ寄ぞを成田五郎ゆ死るゞ二所と約しさ
まゞ。途中ふ少一ゝ合ふ平山殿ハ餘ア早りゆふ軍の魁首ハ。牙方の勢後ふ
置くあそ。高名不覚も人ふ知る。大勢の中へ八騎掛入く対ふ。向死ア。
何の詮ハいやとや。実のこゝろハ小坂のあつる成打上ぜ。馬の頭引立身方の勢後
ゆ。成田遠祭ふ乗ぬく。ア。旗ア。残念と跡より打ゆふ。盛が馬ハ我が馬ア。
聊脚立弱くハゞ。端ゆく追付正なるも李重程の者を能も霜ア。是人

生田森
軍船原
源太夫服
梅花ガ
折ル替戦ノ
図

儀秀清大夫ノ矢ノ事

ぬ先へ駆るゝ。迹より後くれ出あとと洞をうて五六段先ゐたり〜ゞ。あづらく後ら
ゐいそんとや。時ゐ係目断明行が。熊谷平山が攻め前ゆく。又名乗置んとゝ。搔楯
やぐら近く大音ゐ抑以前も名乗る。熊谷直実父子。一谷先陣つゝ。先刻の
風のゐゆやける。城内是を聞夜通〜ゐ名乗。熊谷親子を提来んとゝ。越中次
郎兵衛盛嶋。上総五郎兵衛忠光。悪七兵衛景清。後藤内定経を先とゝ。
二十餘騎木戸を開き掛出ゝ。妄ゐ平山ハ滋目結の直垂緋威の鎧二ツ引両の母
衣を負目糟毛とく笠ゐる名馬ゐ打乗。保元平治ゐ数个度駿首高名せゝ。平
山李重ぞと名乗とく蒐。熊谷親子も劣〜と。火出る斗戦けるゝ。平家の侍た
引入ゐ戸を閉内ゐゝく防ける。熊谷ハ馬を射らるゝ。弓杖突とゝ下立。小次郎直
家ハ十六歳の若者。弓ゐの肘を射らるゝ下立ゝ。熊谷直實大音ゐ。録倉を
立〜ゝ。命ハ右兵衛佐殿ゐ奉り。骸ハ一谷の汀ゐ曝んとゝ切ゝる。直実ぞ去る

水島室山の軍ゐ勝ゝ。高名〜ゝと笠越中上総悪七兵衛ハゐ死ゝ。能登殿も
生ぬや。高名不覚ハ敵ゐこそよ是。我ゐ父子ゐ寄ゝとゝ呼ける。越中次郎
兵衛小村濃の直垂。赤糸威の鎧鍬形の冑を著。連銭葦毛の馬ゐ乗。熊谷
父子ゐ向ゝく馳来る。熊谷父子獅子の荒ゐるゝく。父子相並ぶ競ひゝゐ叫ぶ
〜ゝく引返さと黒〜返せ下ゐ立ゝく組やと呼る次郎兵衛父ゐ引入ゆゐ上総悪七
兵衛蓬き姿動や。我組んと走ゝんとゝる。次郎兵衛鎧の袖を扣。君のゐ大
ゐ是ゐ限るやゝ。必死の鋒ゐ爭んとゝべくもなゝと制〜ゝ。熊谷ハ父子乗
替の馬ゐ打乗働く行ゐ端武者ゐ多く討ゐ。分捕餘ヨヌせり。平山ハ猶差
を討ゐ安ゝ〜ゝ。城中蒐入當の敵を討ゐゝく出。熊谷ハ先ゐ寄ゝ是。木
戸開ねば蒐入ゐ平山ハ後ゐ是ども。敵打ゐる時木戸開ゐ入ぬゝ。ゐ熊
谷と平山ゐ二の蒐を爭ひ〜ゝ。其内ゐ成田五郎も出来り。土肥次郎実平七十余

騎。色〻の旗おし立。弛つめ〻〻戰ひ給。大手生田の森源氏五万餘騎今ハひさく
と押掛ヲ〻ぐ。武藏國河原太郎同次郎兄弟の者あり。太郎弟を呼。大名を
こゝを下さゞ。家人の高名を名譽とす。我らハ自分手を下さゞバ叶ひがたし。然ハ
今城中へ分ち入。矢一筋射んと思ふ。千万が一生き歸らんとおもふ。後残ヲ留ヲ後
の證人ハ立とや云。次郎兼ヲ兄弟の者が。二人留ヲといく程の栄花ら保ひむ。唯一所
ハ戰ひ死いんとく。下人共ハ寄妻子の許へ家期のあ招云遣し。馬ハ乘ず
芥下を履生田の森の逆茂木を上ヲ超城中へ入りける。星明ハ鎧の毛安定
ぎ。大音ハ武藏國の住人。河原太郎私市高直同次郎盛直生田の杜の先陣と名乘
けれバ。城中ヲを呼あつまヲ東國武士の怖〻き。此大勢へ唯二人蒐入何をら仕出
べ。唯置く愛せよとく。討んと云者さらハあり。兄弟弓矢取そのゝぐヲをハ
く。さ〻詰挽詰さんぐハ射る。ヲを〻〻今ら此者愛〻悪〻討やと西國ハ空〻〻

勁弓の精ぎ。備中國の住人。真名辺四郎同五郎と云兄弟あり。兄ハ二の谷ハ置る。
弟五郎ヲを差る。弓矢打番能引く。皆〻保ち切て放てバ。河原太郎が鎧の
胸板後へぐさと射ぬ。ヲ弓杖ハ鎧痦ハぞ。弟次郎肩ハ引掛。生田の逆茂木升ヲ
踰んとする処を。真名邊が二の矢ハ鎧の下散草摺の迦を射ら。ぐさと落同ト枕
ハ臥ら。真名辺が下人落合せ。二人の頭を取。大將軍知盛卿ハ見せヤせバ。哀
ヲ剛の者や一人當千の好ぎぞ。可惜者共が。命を助け見くさぞ宜ひける。真名
辺がヲ始の働を賞し。太刀を賜ヲ面目とぞ云ける。河辺が下人走散く。河原殿
真先掛討死あり〻と呼るハ梶原平三是を聞。私の黨の殿曹の不覺ハく。河原
兄弟ハ討せ。時能ぞ寄ら〻〻と呼ヲ。梶原ハ五百餘騎ハ逆茂木ら除さ城内へ
入んとく蒐る。敵ハ引甘兩の如く射る矢を切拂ひく。搦ハ〻〻く木戸を押
崩し。どっと入。次男平次餘ヲ進む間。父使者を立。後陣の勢續ぬハ先蒐バ。勸賞

あり。
ゐ平ゝと。大将ゐ仰ぞと云送る。平次皆く扣く
武士のゑつゝえ〻落拵弓。引て六人の久さの久
とヤさを給やとゝく。喚く勉る梶原平三士卒ゐ下知し。平次対とゐ續やくと。父
平三ゐ源太景季三郎景茂五百餘騎の兵だ。平家の大軍を切靡け。蜘蛛を
巴の字のごく掛破ア。颯と引く出ゑ。嫡子源太ハ餘りゐ深入くやとぞうし。
平三涙を浮へ軍の先を掛るも子だがるぞ。源太を討せ吾命生うとく何ケけん。
いざ返せやと又引之し。梶原平三先ゐを大音揚昔八幡殿後三年の戦ゐ出羽
國千福金澤の城の責ら已ゝ時。生年十六ゐく真先ア。弓ア〻の眼を兜の鉢
付の板迄射つけら已ゐぐら。其矢を抜ぐ當の矢を射返し。敵を射落し勧賞
を蒙ア。名を後代ゐ上うし。鎌倉權五郎景政ゐ五代の末。梶原平三景時と
く。東國ゐ二騎當千と呼ゑし兵ぞ。我と劣ん敵曹ゐ見恭せんと呼りける。城中ゐ

是ハ哉ゐる能敵ぞ。漏ぢる餘さるを追ゑ巻ける哉。散ぐゐ蹴散し源太を忍甘
く見廻せば。梅の枝を腹ふさし。大童ゐく働ゐあり。近うゐ見ば源太ゑ馬を
射ら已兜も打落さ已。郎ホ左右ゐあり。敵五人が中ゐ取篭ら已必死の働ゐる度
ゐ。春風腹の梅を散し。かゐる烈忍し死中ゐも風流ありと。平氏の上下感賞を。平
三景時救来ア。父子ゝく五人の敵三人対ゑ。二人深ア負せ。源太を拘ひ木戸の
外へ退し。梶原景時ゞ二度の蒐。源太景季ゞ腹の梅と云く後代迄伝ゐる。是哉
肇く三浦。鎌倉。秩父。足利黨ゐ。猪鼻。兒王。野井ア。横山。西黨。綴喜黨
摠し く私黨。私市の黨の兵だ。源平互ゐ乱ゑ合。喚叫声山を響し。地を動し勉遠
雷の音雷の如く。射遠ゐ矢ハ篠を衝両ゐ似うし。或ハ薄ア負深疵蒙ア組
く刺違。又ハ押く首をゑあり。搦ゐあり。ゐ已ども平家大軍ゐ已ば。始終の勝
心元とくこゝ〻ゞ。七日の曙義経の三千餘騎鵯越ゐ打上ア。人馬の息休て出ゐる。

其勢ふ駭きまどふ男鹿二ツ女鹿一ツ。平家の城郭一谷へ落こうける。平家方見をこして近く在ん麓も我ホふ恐き山深うへづたふ。此方へ落しハ惟しゝ多ふ。万一上より敵の落さうとて。大ふ噪ぎ多ふ。義経城郭を遶ふこ下し。試こふ馬少こ落さしふ。或ハ中ゆく覆て落。或ハ足打折こ死ぬるもあり。其中ふ鞍置馬三匹相遠ろく落着こ。越中前司が屋形の前ふ身振して立こうける

一谷落城平家の諸将士討死一門再び海上ふ漂ふ

義経大勢ふ向ひ。馬ハ主こゞ心ゆく落さんゆへ。痛ハ損ぜずして。義経をゆ本ふせよこく。先三十騎ばかり一時ふ落こう。是をうこく三千餘騎皆續こ落ば。其外小石交の砂ろりけるゞ流ぬ落しふ二町斗ゆ颯と落しふ。壇ろる外ふ扣へこう。其こう下ば下せば。大盤石の苔むしこるが。釣瓶下しふ十四五丈ぞ下りこる。其より先ハ進べくもこぞ。又後へ返こ返ぬ各こぞ最期とあきらこるふ三浦の佐原十郎義連ぬこ出。我ホが方ふ鳥一ツ立こゞふ。朝夕ケ拔の所ハ勉行け。是ハ三浦の方の馬場ぞこく。真先掛こ落しけるゞ大勢こふ續こ落ぬふ後より落ば鎧の鼻ハ先陣の首鎧ふ障程こ。餘りのいぶせさふ眼を塞。曳こ声しこ馬ふ力を附こ落ぬ。人の所為とハ見ず。唯鬼神の所為ぞこえしふ。落しこ果ぬふ。肩を噇と作ぬ。山彦ふあこえ十萬餘騎ハ皆ゆ多ふ。村上判官代康國が多ふ。火を出し平家の屋形仮盃を。片時の煙と焼拂ふ。炎一圓ふなりけるゞ平家の兵ハ前の海へ走こ入渚ふ助船いこくもあとのゝぶ。一艘ふ鎧ろる者。四五百人千人斗ゆ乗こるゞ渚ろ三町計漕出こうち。目の前ゆく大船三艘ばかり。其後ハ好武者斗。雑兵ハ乗べうもこく。太刀長刀ゆく打拂ふかくこうハ知ぬ。敵ふ逢ては死もせず。乗しこ敵ふ逢ては死もせず。船ふ乗付廻着。臂を打斬こ肘を切落さこ。一の谷の汀ふ朱を流し列伏けり。大てゆも濱のゆゆも武蔵相摸の若殿曹。面も振ば命も惜ぞ戦ふ。能登殿ハ海

度の軍ハ一度も不覚を取ざりき。今度ハいかゞなれけん。薄墨と云馬ハ策西を指て落ぬ。播磨の高砂より松ゆく。讃岐の八島へ渡らるゝ。新中納言知盛卿。生田の森の大将軍なるべし。黒煙舞掛る所へ。徒早西の方ハ破るゝ。其以下ハ皆逸足ハ散乱せり。越中前司盛俊ハ山の方へ取物とりあへず落られ給ふ。其の侍大将ゆく今ハ落る所叶ハと扣て敵を待所ハ武蔵國の住人猪股小平六則綱。走来て組。猪股ハ関東の力者。鹿角三の草刈ハ振く引裂と云。盛俊ハ人目ハ三十人の力を顕せり。六七十人一度に上下に舟を。唯一人一度に推上推下に成と云大力なれば。猪股を強く押へ。猪股も足逸痙て働き。暫く息を安めて。敵の首を取ハ互ハ名乗るとぞと云を。盛俊実ハもとより。某ハ平家の一門。一ノ谷。身不肖ゆく侍ハ下ず。越中前司盛俊と。和君とハ。猪股小平六則綱。今我命助るべし。御辺の一門何十人ありとも。勲功の賞ハ申。命斗ハ助け進ぜん

と云けるハ。盛俊怒て身不肖なれども流石平家の一門。源氏を頼んで出ぬ。源氏も又頼るべくもあらざれ。悪き和殿の中枝なるべく。既ハ頭を搔んと云。正に降人の頭を。ハ搔やあると云。更ハ助んとて赦し給ふ。暫の上ハ腰を二人息継居る処へ。緋威の鎧着て月毛の馬ハ乗る武者。是ハ来る越中前司ハ怪氣ハ。けれども。猪股ハ親一人見四郎則綱ハ在を。ハ来るハ苦しうはなれども。近く寄ハ組んと盛俊頻ハ入見を。ハ居る傷の由断を。ハ待。猪股起上て養を握堅め盛俊ハ鎧の胸板を突て後仰ハ倒し起上らんとする処を。猪股上へ乗掛て三刀刺て首を取。太刀ハ貫き日来平家方ハ鬼神と覚し。越中前司盛俊を猪股小平六則綱対取と。其日高名の一ハ筆ハ附られける。西の方の[illegible]と。薩摩の守忠度。粕地の錦の直垂ハ黒糸の鎧。驪ハ鋳掛地の鞍置て。[illegible]供て。いと美しく落ぬ。武蔵國の住人岡部六弥太忠澄追来る。敵ハ後ハ見セ

摂州一谷鵯越坂の図

[illegible]ぬ。返し勝負わるしと云ひて返り見れば身方ぞと思く。振仰きのく内[illegible]
狡猾黒を刃方ひるめくろ人[illegible]の紙。のる石平家の公達なるぞと指出引組
百騎ばかりの兵へ國々の假武者なるべし。我先に落散て一騎も落合ず。忠度は熊
野育の大力究竟の早業なるべし。悪い奴ぞ。御方とおぼえたるぞ。引組て捕て
引寄馬上ゆく二刀落付ゆく一刀を突まゐらす。二刀は鎧ゆく通るべし一刀は内冑か
ぶと。落ぬ。死ぬ。取く押へ頸を掻んとしぬる処に六弥太が童殿馳来る。
疾下討刀抜く忠度の右の肘を臂の本より打落さ今はうとやられけん皆
除家期の十念唱させよとく。六弥太を組ぐ弓丈なり投退其後西に向ひ十念
し終後より六弥太頸を賜ぶ。好者とは思ひ。誰と知ざりしが殷に結付る紙
ばし旅宿花と云題ゆく。歌一首遺まゐらせ

ゆき暮て木の下蔭を宿とせば花や今宵の主ならまし　忠度

と書れたり。是ゆく薩摩守と知まゐらせ。頸を太刀の鋒に貫き。大音声に
此日来思神とも崇へし。平家の大將薩摩守忠度なり。岡部六弥太忠澄が。討
奉りしと呼はべり。敵も刃方も是を聞。空最惜武藝といひ歌道といひ。好大將に
く笠つる成とく。鎧の袖を濡しける。生田の森の副將軍本三位中將重衡卿は茶
褐色を白く黄なる糸しく。岩に群鶯縫ふ。直垂に紫下濃の鎧着く。鍬形
打ふ冑。金作の太刀を帯。童子鹿毛と云駿足に。金覆輪の鞍置て乗給ひ。
乳夫子後藤右兵衛盛長に秘蔵せられし。夜目無月毛に乗られ。主従二騎助船
に乗んとく。渚の方へ落給へ如。庄四郎高家。梶原源太景季追掛られ。船に乗
隙なく。湊河撥藻川をも打渡り。板宿須磨を過西へ落給ふ。乗給へる童子鹿毛
とく。名に負る良馬ゆえ。追付て叶じ。梶原遠矢に馬を射る。進退究くて[illegible]
に。乳夫子盛長五騎召まゐらせ。鞭鐙合せ逃延る。三位中將に盛長

我をつゝ弃何囲へ行ぞ。日来左ハ契らざりしをと。ゆりもゆる波。虚聽ざ〳〵く赤効を
撥遣跡を闇〳〵迯去ぬ。中将今ハ頼なく刃を投んと。海へ颯と打入ぬと。遠浅ゆゑ沈
ざる根なく。馬の疵深けれバ。遠く打せるとも叶じ腹切んと〳〵ゆふ処へ庄四郎兼
付。馬より飛下る。三位中将を捕へ。我馬ハ搔兼鞍の前輪ハ盤附。我身ハ兼晉ハ
乗て御方の陣へ引入ける。盛長ハ必ゐ世。熊野法師尾中法橋を頼隠し居けゝ。
法橋死〳〵く後。後家の尼公所詔のゆゑく都へ上るハ。其伴〳〵上りけれバ三位殿
深く不便加られ〳〵身の一処ハつゆも成ざ〳〵く。ゆも寄れ後家尼公の供〳〵く上て
〳〵と凡彈〳〵く非ず。盛長も流石恥〳〵ゆゑ〳〵ん扇を顔ハ蓋けるとゆ。扨又
熊谷直実ハ平家の公達助船ハ乗んとく。汀の方へ落行ゆふと雲。好大将ハ組んと。
其道ハ進ぜ俟所ハ。策貫ハ鶴縫ゆ直善ハ。萠黄匂の鎧欽形の冑金作の太
刀を帯。剱を負縄掛く。連錢葦毛の馬ハ。梨子地の鞍置。朱の塗込藤の弓

を横へ〳〵ず敵一騎。沖の船を目ゑ海へ颯と乗ハ五六段泳せけゝ。熊谷能敵とゑ必進
ゑ寄。ゆふ能大将軍とゑ〳〵く。まさゑゆふ敵ハ後をゑせゆふゆゑ返さゆゑ〳〵と。
扇を揚て招きけれバ。招れて取て返し。汀ハ打上らんとゆふ処ゑ。熊谷浪打際ゆく
押双。無ゆと組でどうと落。取て押へ頸を掻んと冑を推仰ゑれバ。薄假粧〳〵く鉄漿玄
ゑ我子小次郎が齢ざりゆく。容顔誠ハ美麗ゑ抑ゆゑゆ入ゆく渡〳〵せハゆゑ。名乗せゑ。
助け進ぜんとやけれバ。先和殿ハ誰ぞ。物其数ハゆゑゆゑ。武蔵国の住人熊谷次郎丹
治直實と名乗々ゑ。扨ハ汝ハ好敵ぞ名乗ざとゑ首ゑく人ハゑ〳〵知る者あん
ぞと宣ゆゑ。熊谷哀大将軍や此人一人対ゆゑゑ。貝ゑ軍ハ勝ゑ根ゑく。又助中
〳〵ゑ。勝軍ハ貝るとゆ。今朝我子ゑ薄ゑを貝ゑゆ直實心苦きハ此
殿討ゑゆひめと雲ゑゆく。親兄の歎悲ゆゑん程いくでくゑゆん。助けやさんとゑく。後ゑ顧れ
ゑ。土肥梶原五十騎ざりゆ出来る。熊谷涙を流〳〵。あゑ御覧ゆ。いゆゆも助け進ぜんと

存ぜしたり。身方雲霞のごとく満こそ迯しかども。同くは直実が手ぬかん。後の小孝養をも仕ばやとやけばこそ。唯疾く首をはねと宣ひ給へ。熊谷餘り最愛何くかを立つるとも覚へず。目も闇心も消果。前後不覚ぬかりけるぞ。さくあらんもあらばこそ涙ぐらん頭を掻切ぬ。哀れ弓矢取身程口惜かりしかるべきか。武藝の家に生れさへ何しかに唯今かかるうきめ成るべき。情なくも討奉るのうれと。袖を顔に推當て。西こそ泣居たる。頭を裏んとて。鎧直垂解とれば錦の袋に入られたりける。笛を腰にさしたる。あの此暁城の内ゆく。管絃の音ひびくは此人とゆくべしと。全く。當時何方勝ぬるとも御方の内。軍の陣に笛を持入るもあるべしと。上臈は優しかりの哉とて。見聞る人大将軍の心賢に入ばこそ。人涙を流しけり。後に実は修理大夫参議経盛の乙子。無官大夫敦盛とぞ。生年十七にぞなられける。件の笛は祖父忠盛笛の上手にて。鳥羽院より下し賜はる。経盛相伝たるとぞ。敦盛笛の器量とぞ。依て名を小枝と

付る（世に青葉笛と云傳る是也）是より熊谷が發心は発しぬ。狂言綺語の理とぞ。遂に熊谷直実長年伯母聟久下權頭と領分の境を争ふとて論者殿前に對決の時直実武道公高名なれども不弁ゆく理を枯髻切弁黒谷に至て法然上人の弟子成蓮生と云。濱辺の軍は門脇殿の末子。藏人大夫業盛と。常陸國の住人土屋五郎重行と組て討れ。皇后宮亮經正は武藏國の住人河越太郎重房討取。従五位下清定。淡路守清房（相國入道の六男七男）若狭守經俊（参議業盛三騎打連敵中へ破て入。散々に戦ひ一所に討死に。新中納言知盛卿は生田森の大將軍なれば。其勢ヨワく討死し。又は落失御息従五位下知章。侍は監物太郎頼方。主従三騎汀の方へ落ぬ。処に児玉黨と覚しく。團扇の猫差たる。一群追掛て。監物太郎を上手ありけれども。元て返し。旗差を頭の骨を射て。馬より落と。其大將と覚しき知盛卿は組んと馳双べる処。此子息知章父を討せじと。中に割て入と組で。ともに落ぬ。押へ頸を掻起揚んとしゆく処を。敵は童落合て知章が頸を。監物太郎又

其童を討ねぬ。其後ゆくすゑ働く討死せり。此勢ゆ新中納言遊延ゆ海廿餘町を馬ゆく泳せ大臣殿の御舟へ寄れ給ふ。舟ゆ人多く馬立がるを見て渚へ馬を追返さる。河波民部少輔重能。此馬敵の物ゆ成いて射殺いんとて。片ゆ矢番く公げ是ぞ知盛卿とこそ何者の馬ゆするぞ。唯今我命を助うー者とさく止め給へり。此馬主人の別を悲むと。松を漕行を背く沖迫暮ひまり。深をゆくゑ笑ひ。渚の方へ行しゆ。いく度も振返りて。其後陸へ上て休居うる。河越太郎重房取て院へ奉り。御厩ゆ立ゆる。元来此馬ハ院の御秘蔵なりしゆ。宗盛公内大臣ゆ成て。悦ヤの色一時下さる。宗知盛卿へ預ら是しうる。信州井上立西ゆ。井上黒と名とー。此度ゆ河越黒と名是しも。知盛卿大臣殿ゆ向ひ。知章ゆ浸是監物太郎を対せ。心細う成て。我子の対る。餘所ゆ。いとる親ゆ是ぞ。かく道是ゆ。ー。殊の其子を父を助んとて命を捨るゆ。人の上ゆ愛情も忘れると。心全論ー。

いとゆ。我身の上ゆ成ハ。命を愛ーゆ。今ゆ知是ハ。人ゆ。ハ。ゆ。悔しうゆて。鎧の袖を顔ゆ當泣是ゆ。大臣殿寛ゆ知章。父の命ゆ代ら是ぞ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。利心も剛ゆ。ゆ。大将ゆ。ゆ。清宗と同年ゆ。今年ハ十六ゆて。ゆ子右衛門督の座ゆ方ゆて。涙ゆ。並居ゆ面ゆ甲鎧の袖を濡ゆ。小松殿の末子備中守師盛ハ。主従七人小舟ゆ乗落ゆ。新中納言知盛卿の侍ゆ清右衛門公長飛来て。ゆ。備中守殿の小舟と。ゆ。ハ。ゆ。松へ渚へ掉寄ゆ。大の男鎧着ゆ。松へ岸波ゆ。飛乗ゆ。松へ。此ー。備中守浮ぬ沈ぬせゆを。畠山ゆ郎等本田次郎親経。主従四騎走来り。馬ゆ下。備中守を熊ゆ。ゆ。引立首と。対生年十四歳ゆ。越前三位通盛卿山のゆの大将軍ゆー。其勢討是。又落散ゆ能登殿へ落ら是。自害ゆ。近江の佐く水黨の木村三郎成綱武藏の王井四郎資景。彼是七騎ゆく取竜対ゆ。侍一人附居ゆ。何地へゆ逃

去ぬ凡東西の木戸口時をうつる程に。源平数を尽し討れ。櫓の前逆木の下。人馬の肉山の
ごとし。一谷の小篠原緑の色紅に変じ。生田森の山傍海の汀に射られ斬られ死
ぬる数しれず。源氏方より斬梟る頸二千余人。宗徒の人々ハ越前三位通盛卿。弟蔵人
大夫業盛。薩摩守忠度。知盛卿の息知章。備中守師盛。相国入道の六男七男に
清定。淡路守清房。経盛卿の嫡子皇后宮亮経正。弟若狭守経俊。其弟大夫
敦盛以上十人。一旦十四国を従へ勢の属も十余万。都へ近付こと唯一日路。此度ハ頼母
しかりしに外。義経の武略ゆゑ片時に攻落され。主上を始船に召。潮に引れ風に
従ひ。紀伊路へ趣く船もあり。蘆屋の沖に漕出て波に漂ふ船もあり。又ハ須磨明
石の浦伝ひ。泊定ぬ楫枕。片敷袖もしほれつつ。朧に霞む春の月。心を摧ぬハなかりし。
淡路の迫門を押渡り。絵嶋が磯に漂へバ。波路遥に鳴渡り。友迷せる寒夜千鳥
も其身の類かなかく浦々嶋々に散浮べバ互の生死も知がたく。心細さぞまさりける。

通盛卿の侍滝口時員。北の方の御船に参て君湊河の下にて木村玉井とか討れ
給ひぬ。時員も供に討死と常に心ほどに然様と仰に吾らに在るとも必存命て誘行
給へとも尋参せたとく。かくの仰ゆゑかひなき命生強面こそ是まで参り候へと申し
けれバ北の方左右の返答もなく。引被ぎ臥給ひ唯一人附添し乳母の女房も同じく
歎沈たりし。七日の暮過までなかりし。十三日夜泣起も上り給ハず。十四日ハ八島へ押
渡る。夜も深船中静まりたれバ乳母の女房にやさしく君の討れ給ひしと聞しかど
実ともおもはで在しが。此暮程より実に左もありけんとおもひ定めし。其故を告ん湊河
とかやにて討れなんと詰されて。其後生て逢ことと云者一人もなし。明日討れなんとするの夜
白地なる所にて行合たりしが何より心細げに打歎き明日の軍にハ必討れんと語る
ぞ我らが身も成ん様ハ思ふことのみぞなれど仰しかども軍ハ何めのとの習ひ一定なるべ
しとも思はで。あらつるとこそ悲しかりけれ。其を限と知んば。後世の契をもや交さんと思ふも

平家物語図会巻之九
図ゞ
鯰
長本

今更歎きて直なるべき成事も。日来は隠しく習ひしかども。餘りに心深うおもひ詰
トなく。云出るに付て嬉しげなく。通盛三十に成まで。子も無やらるに哀同じうは
男子にもあれかし。浮世の忘形見にもとこそ置計。扨幾月ゆき成らん。心地いとゞ
らんいとなみ波の上船の中の住居なれば。別に身々となるべき時いとゞ仕なれそなど
云ふにつけて。豫言の和。誠やらん女は左様の時十に九つは必ず死ぬなるべしと思ふ
しう方見目をうとく。空なるやうも心憂し。静に身と成て。猶少者を育て。
人の紀念にもとなれば。そは其成べき度どなれば。昔の人は恋しうとなれば
増るとも。慰まるもあらじ。終は道なるべき道なれば。木思幾に此世を忍びるべき
心に任せぬ世の慣はなれば外のことも知来たるべきなれば心憂し。日興は夢
めき醒たる仏に立そへて。生て居て鬼に角に人を恋しと思うんより。水の底へも
入なやとなれば。定て立そう。足下一人と留て。歎をなるべし心苦しけれども。我は装

束の足を早くいそぐべし。僧にもなり。ちゝ人の菩提をも吊進せ。我は後生を
色助け給へ。書置る文なれば。都へ使て宜べし。細と宜べ。乳母の女房涙を押へ幼子を
振捨老て親を留置。遠く見送附参せい志をば。いかゞ其さまでいや此度対面
させるべき君。こちの北の方も此歎の程を疎ましく思しめさるべき生涯
ゆゑ後六道四生の間ゆく何世の道へか成せ給へ。行逢せ給へ。不定なるべき身を
沈めるべきに由なく世を静に身ことなる岩木の間なくも少人を生立
此姿を香佛の御名を唱へ。なる君の菩提を吊ひ進せ給へ。其上都の成で
推て積を成せ給へ。仰られいかん恨しうも兼ねと泣口説なべ北の方此
る悪うも知せるのさるいと見へ。推量て見へ。世の恨と別の悪
さめ。身をも投んと云常の習ひ。ゆゑ成べき立て
なロゆも洩べ。今は夜もよぬいぞ寝んと宜べ実に思石立べ我をも千尋の

底をも引見るべし。後は進まず。片時を存命べしとぞ。ぬしを傍の些行目
睡の隙の北の方越に起き。漫々海上の波を西とぞ。月の入る山の端を其方
の空と定めつ。静の念佛一度沖の白洲の啼千鳥。天の門渡る揖の音。折々哀も勝れ
ん。忍び声の念佛百返斗唱へ。南無西方極楽世界の教主弥陀如来本願誤らず
飽く別れ一妹背の恋心一蓮の泣く過ぬる口説。南無と高らかに一声。
海の沈給ひぬ。一谷より八島へ推渡る。夜半過ぬれば。船中静かに知る者なし。其中に
揖取一人寝ざりしが。是を見てあの乙舟より女房海へ入せ給ふと。乳母の女房打
驚き傍を探れども。笠ばかり残れば。唯夢と入と喋ぶけり。数日の起居取揚んとされ
ば。春の夜の習ひ打霞四方の叢雲浮れ来て。彼方へ月朧ゆく。是程遠程
へ経て。上へ上へと。早此世の人。白絹袴の練貫の二衣を着多り。乳母恨たち
歎給へども。一言の返事なく。後の通ふ息ぶき絶果ぬ。春の夜の月も西へ傾き。

霜る空も明行べ。名残を浮上へ給ふ。故二位殿の着背一領残りて
然引纏ひ再び海へ沈めつる。其跡より乳母墳を。入を。難なく抱へ。跡の菅笠
偏に勧るなり。故三位殿の弟。中納言律師忠快の頼を。頭を剃捨戒を保ち。主の
後世を吊ひ奉。昔より男は後を。姿を替る。常の習ひ。身を投るとぞ。
なり。忠臣二君に仕へ。貞女二夫に見ざる先言。真に保ちぬ。乳母の
詞の中にも心に任せぬ世の慣ひ。ぬ外の事。出来ぬ。世のうんぞ不思議。此北
に前に。二代の后。世のうんぞ乱れて。此北
の方の刑部卿範方の女。禁中一の美女。上西門院の女房小宰相殿と。安元
の春十六歳。文学院法勝寺へ花の御幸あり。通盛卿其比中宮亮。供
奉。此女房と。初歌を詠。文を。
なり。既に三年に成。通盛卿今を限りの文を書く。小宰相の許へ。

ぞ〻しくゝべ空〻しく帰る道ゆく里〻御所へ参る人〻。彼使心利と云ふ侍
ありゆく彼文を乗せて車の簾の中へ指入れ小宰相車の置くゝもゆく大路へ
捨んも流石ゆく袴の腰に挿御所へ参る人〻呼も答ふ宮仕へ〻御前に
彼文を落さしめ女院早くも取せ給へ。御衣の袂に引隠させ給へ。扨〻物を
あそ求めさせ此主人の孰なるらんと仰げば御所中の女房達萬の神佛を
知り給へ。この文中。其中に小宰相斗顔打赤めたる〻物をもやさしぎ女院も
内〻通盛の中と知り名をさりけれども扨此文を披き御覧ぜんと綺麗の煙の
匂ひに筆の深きふ。筆の立所も尋常なるべし。餘りに人の心強きも。今は中〻嬉しくぞ
細〻と書き奥に歌一首あり

我恋は細谷川のゆるぎなし。ふ〻えさせたくぬるく袖の雨

女院是に逢ぬを恨る文なり。餘り人の心づよさも。今は中〻怨とぞ中比小野小町眉目

像嚴〻。情の道の難かり〻べ人〻者肝魂を傷ると云ふ。さる程に強き
名をも惜まぬ。終に人の恋の積りとなく。風を防ぐ便もなく。雨を漏さぬ業も
宿に墨ぬる月星に涙に浮び。野辺の若菜沢の根芹を摘くれそ露の命なるぞ〻
思ひのゆゑ思ひのゆゑ。ぞと〻。現石寄奈も自ら泣るるあさぢ生の
浦のの細谷川の丸木橋。ふ〻えさせたくぬるく袖の雨
胸の中の恋ひ富士の煙に顕る。袖の上の涙に清ん〻関の浪なるぞ。眉目に辛の花なれ
ども。三位此女房を給はる。互の志浅からざるべ西海の波の上舟の中をも引具し。終
に同じ道へぞ赴き給ふ。門脇殿に嫡子越前三位。末子業盛にも後れ給ひぬ今
の頼に能登殿僧に中納言律師忠快斗に。故三位殿の信なり。此女房をぞ〻心細くぞ思ひ給ふ
思ふ其さへかなふ事なり。べ〻ぞ心細くぞ思ひ給ふ

平家物語圖會卷之九終